

文語日誌（平成二十八年四月二十五日）

三月下旬、新橋驛前廣場の古本市に赴き、新潮社刊の雑誌「日の出」昭和八年新年特大號第一附録、「親しく接した 十二人の偉人を語る」を購入す。二百圓也。色の變りたる古書籍の掘出物をば入手するは愉し。

本書は、雜誌附録と言ひ條、二百四十頁もありて、一冊の單行本以上の充實せる内容にて、讀み應へ十分なり。

◎伊藤博文公を語るは徳富蘇峰

明治三十一年春、首相官邸に於ける最初の會話は以下の如し。

博文『徳富君は尊皇主義であるかどうか』

蘇峰『日本國民である以上、誰が天子様について彼是申す者がありませうか。私は申す迄もなく皇室中心主義であります』

博文『それぢや宜しい、一つ話さう』

博文尊皇家松陰の門人なるを再認識せしむ。

◎山縣有朋公を語るは松岡洋右

明治四十年夏、二十八歳の洋右は關東都督府課長

初對面にて、洋右『公は滿蒙に對し如何なる政策をお持ちなるや』と尋ぬ。青二才の洋右に對し、有朋は對等なる態度にて、日露戰爭後の明治天皇の御前會議の模様など、二時間に亙る議論を始むと云々（しかじか）。政策の内容記述なきは弱冠にして文至らざるか。又、仕事を止めたしとする洋右に對し、有朋、決して早まるべからずと助言す。

◎大隈重信侯を語るは田中穗積

穗積曰く、侯は常に私等を論して曰く、『回顧するな、唯前進せよ、悲觀するな、唯一切を樂觀せよ』と。

◎西園寺公望公を語るは近衛文麿

文麿曰く、公は非凡なる讀書家にして、漢籍の讀破力は非常なるものにて、金石文を特に喜び、普通の漢學者などまるで話相手とならず、内藤湖南、狩野亨吉等諸博士と親交あり。佛蘭西語は造詣深く、ゴオチエと共著の佛譯「古今集」ありと。

◎東郷平八郎元帥を語るは海軍中將佐藤鐵太郎

鐵太郎、大正十二年の大震災の折、麴町上六番地なる東郷元帥邸を見舞ふ。奇蹟的にも周圍すつかり灰燼に歸しつる中に東郷邸のみ焼けずに残る。上將軍たるの第一の資格は、備はる「自然の運」なり。

◎大久保利通を語るは大久保利武侯爵

利武曰く、明治十一年五月十四日、紀尾井町にて兇刃に仆るるに、大西郷より父に宛てたる三丈もある長き書狀、懷に紫の袱紗に包まれ血に染まるありけり。（凶變の十日ばかり前に三條公にお貸しし、返卻せられたるものとぞ。）